

政治・メディア・政治漫画(3)

茨木正治

II I 問題の所在 政治シンボル論と政治漫画

(1) 政治シンボル論の系譜

1. 「シカゴ学派」——メリアムとラスウェル——
2. M・エーデルマン——政治儀礼と政治言語——

(以上 第三卷第二号)

3. シンボル操作研究の流れ
4. 最近の政治シンボル研究

- ① 八〇年代以降の政治シンボル研究

- ② 儀礼としての選挙

- ③ 政治漫画との関連

5. 日本の政治シンボル研究

(以上 第四卷第三号)

- ① 日本の政治シンボル研究の系譜

- ② 政治漫画との関連

(以上 本号)

III (2) 隣接諸科学の政治シンボル研究 マス・コミュニケーション論と政治漫画

- (1) 「効果研究」の系譜

- (2) 「現実の再構成」論と政治漫画

- (3) 批判学派の理論との関連

IV 結論と展望

5. 日本の政治シンボル研究

①日本の政治シンボル研究の系譜

二〇世紀初頭にアメリカ政治学に登場した行動科学的政治学が与えた日本への影響は、第二次世界大戦直後の「若手の行動論派研究者」たちに表れた。ドイツ国家学による制度論的政治学が中心であった戦前の政治学に比べて、ラスウェルの精神分析論の色彩が強く、専ら政治の主観的側面を研究する政治学が彼ら「若手の行動論派研究者」たちの中で関心の焦点となった。⁽¹⁸⁾その中で、人間の社会行動が象徴や記号の体系によって成立しており、これらを媒介にしたコミュニケーション体系によって政治社会が構成されていることに着目した研究(「象徴過程の研究」)が彼らの間で顕在化した。⁽¹⁹⁾本稿では、このような第二次大戦直後の「若手の行動論派研究者」を、「第I世代」の政治シンボル研究者とし、それ以降の、特に七〇年代以降の政治シンボル研究者を「第II世代」とする。⁽²⁰⁾

「第I世代」の政治シンボル研究は、大衆社会・大衆民主政に関する諸理論(エリート論・大衆社会論など)を背景として、政治権力・リーダーシップ・政治意識・政治言語・組織などの政治学の諸現象を対象にして、象徴それ自体の考察や象徴の受容過程の研究が行なわれていた。「第II世代」の政治シンボル研究では、受け手の性質(能動性・受動性)や行動全般をふまえ、象徴過程の相互作用の側面を重視する。「第I世代」の提示したモデルや、人類学(儀礼・儀式の研究)や社会学(象徴的相互作用論、演劇論的アプローチなど)のような隣接諸科学の知見をも加えてより個別的な研究となっている。

「第Ⅰ世代」の政治シンボル研究

政治を、シンボルを媒介とした権力過程としてとらえ、政治システム論を彷彿させるような政治過程論を展開させたのが岡義達である。彼は、「権力の循環と象徴の選択」⁽²¹⁾や「政党と政党政治」⁽²³⁾の論文にみられるように、政治過程におけるシンボルの役割に着目し、次いで行動科学の影響を受けて、シンボルによる人間行動と政治(過程)との関連を明らかにする。さらに、言語学・社会学・社会心理学・人類学などの、政治学との隣接分野の知見を援用して、役割や演技のもつ象徴的な意味・機能から政治性を読み取り、それらを政治行動の解釈枠組みとして用いるのである。

「権力の循環」論文において、彼は近代社会における(政治)権力と社会の利益との関連の間に作用する象徴の機能を述べる。資本主義の進展が社会利益の分化を促進させるために、分化された利益ないしそれを所有する集団をどのように調整し統合するかが象徴の役割となる、と述べている。ここにおいて問題となるのは、分化された利益が觀念化されると、それを表す象徴も分化されるという点である。いいかえれば、このことは「総論賛成・各論反対」のなかで「各論」がそれぞれの利益をシンボル化させることである(たとえば、選挙で党の公約として「緊縮財政」「財政削減に聖域なし」と叫んでいた代議士が、「整備新幹線は地元の悲願であり(公約)である」と述べるようなことといえる)。この象徴の分化が政治システムの活性化をもたらすと岡は述べている。もっとも、「政治的にはたえず平均化」することに よって「大衆の忠誠」を確保するのが権力の働きの一つであるとなると、分化された象徴を包括する「ヨリ強力な象徴を操作」する必要がある⁽²⁵⁾。

ここにおいて、彼は象徴と人間の心理との関わりに目を向ける。服従の合理的な根拠を追求すると、受け手からの「信従」に至るが、この「信従」を得るためには大衆の情緒に訴えることも必要になる。このとき、提示された象徴に對して、大衆が現実と照合する余裕を失うならば、「権力」にとって支配関係の樹立には好都合となる反面、大衆自身の象徴における現実感覚が失われるために、象徴の意図がどのくらい達成されたかを大衆の反応から読み取ること

が難しくなる。このような「現実感覚をもたぬ大衆」と「状況認識をもたぬ権力」とが行なう相互作用を「権力の異常循環」と岡は述べている。

では、「権力の(正常な)循環」とは何か。彼は、権力(体)と社会との行動および結果の相互作用を「権力の循環」とよび、機動力のある権力はこの「権力の循環」が円滑になっているとしている。次いで、「権力の循環」は二つの下位概念である「権威の循環」と「政策の循環」に分けられる、とする。前者は権力体の、後者は社会の、安定にそれぞれ関わる行動の総称である。この「権力の循環」の活性化(と維持)——特に「権威の循環」において——に必要とされるのが合目的機構としての官僚制であり、これを維持するのが大衆の「信従」——権力への正統性感情の強化——であると述べる。この「信従」は、正統性に関する大衆の帰属感を経て成立する。²⁷⁾

「権力の循環」は大衆の指示にもとづくことを示した岡は、他方で、大衆それ自体も社会や権力との関わり(「同化」identification²⁸⁾の形で表される)なしには存在しえないことを導き出す。これによって、政治社会における安定(「権力の循環」)がはかられる、と述べている。この「同化」は、人間が環境と関わるときの一つの様式であり、環境認知の際の枠組み(「参照基準」frame of reference)による相互作用の結果として表れる。この「参照基準」の形成に参加し、集団においては雑多なものの複合として存在する統体を「象徴」と彼はよんでいる。政治社会における「参照基準」を正統性のあるものとみなし、この正当性を象徴化することを通じて社会や権力の中への「同化」が行なわれる。このように、「権威の循環」と「政策の循環」の両方に象徴の操作が媒介をし、個々の利益の分化の隠蔽と集団意識の形成が「同化」の過程を介して行なわれるのである。

「政治」の舞台において、権力の側にも大衆の側にもともに「同化」が求められるのは、「政治」が「同化」を必須要件としているからに他ならない。岡は政治と象徴との関連を説く際に、次のように述べている。象徴の選択は自発的な行為である反面、選択が信託を意味するので、自発性と現実感がかえって制約される。この象徴の選択の逆説は、

「分裂の存在を控えて一致の要請を掲げるもの」であり、「分裂が高ずれば高ずるほどそれだけ一致が求められる」という「政治の逆説」に照応する(岡、1953 p.623)。ここで彼は、分裂を仮象化して一致を前面に掲げることが政治の実質であると述べている。

ところで、これほどまでに一致を求める政治とは岡にとって何だったのだろうか。彼は、「共存象徴」の概念を用いて、政治を人間が共存して社会生活を営み自己の価値の実現を行なうための手段であることを次のように述べる。²⁹異なる価値をもつ人間個人は、本能のおもむくままに自然的な共存をすることはできない。そのため、共存の志向を内包する風俗や慣習、法律など共存を表現するものを「共存象徴」として、これによって共存を図ろうとする。ところが、これら「共存象徴」と共存の現実そのものとは食い違うことがあり、この矛盾が対立を生じさせる可能性をもつ。そのため、矛盾の解決の手段として求められるのが「政治」である、と彼は述べている。

したがって、政治は作爲的・目的的行動の性格をもつが、作爲主体ですら目的の内容や了解の程度がはっきりしていないことが多い。さらに、政治を支える価値が実証にそぐわないことが多いから、価値体系はつねに不安定になるおそれがある。この不安定性は人間関係、ひいては社会全体の不安定に広がる可能性をもつ。したがって、強制力によって安定を保障し、その強制力を正統化するために新たな価値体系ないし引照基準が形成される。ここにおいて、政治権力の必要性が述べられることになるのである。

また、「同化」の必要性とともに、「同化」を促す形態的特徴として政治における演技の問題がある。彼の論点を要約すれば以下のようになる。価値の不安定性や共存のズレを補うのは権力(強制力)の直接的な行使だけではない。政治の舞台での行為者の政策やイデオロギーに積極的に「同化」していく観客としての大衆の役割が大きい。この観客は、「同化」を演技を通じてはかるとともに、政治の行為主体としての政治家に「吸収」(assimilation)されて演技共同体を形成し、演技者の「演技」がバレる(それによって芝居がシラける)まで続く。

政治の概念、政治の現象を権力と「同化」との関連でとらえ、象徴によってこれらを説明する立場を見出したのが岡であった。「政治漫画」というメディアと象徴との関わりについてはそのものの言及は見られなかったが、政治漫画の描く対象が象徴的世界をもつ政治の世界であることを明らかにした点で、政治漫画研究への影響の可能性を見ることが出来る。

戦後の政治学で計量的政治学の先駆的存在であった京極純一は、コミュニケーション過程と政治シンボルとの関連を明らかにしようとした。政治コミュニケーションの一つとして政治的リーダーシップを対象としてとりあげ、象徴過程の分析を行なっている(京極 1968)。

彼は、「マス社会におけるリーダーシップ」は対象と方法の両面で従来の為政者論とは異なっていると、リーダーシップ研究の状況を指摘する。次に、リーダーシップ一般が作動する契機の検討を行なっている。リーダーシップ・グループの中で見られる特性を、そこで用いられ(生産され)るシンボルを手がかりにしながら明らかにする。

京極は、リーダーシップを特定の集団における人間関係の分業とその象徴化による行動の制御ととらえる。分業の中で生ずるシンボルが再生産されて、集団内に広まり、有効に作用する。このとき、この象徴は集団の正当性の賦与(剝奪)に関与し、組織化に貢献する「組織象徴」となっている。分業をもとにリーダーシップ・シンボルの生産過程をみると次のようになる。分業は環境適応のための一つの方策であり、その中に適応の効率を高めるためにフォローアップに対して行動を制御することがある。この制御の具体相は、言語社会と文化において造形され、調整されて当該シンボルができあがる、としている。このような象徴化ないし象徴の形成過程——引照基準にもとづいて形成されるリーダーシップ・シンボル——を、機能分化の際の社会過程と対比させて「象徴過程」と彼は呼んでいる(京極 1968 p. 238)。この「象徴過程」の特徴は以下の三点である。

①「課題」の提示とその処理の要請。

②リーダーとフォロワーとの分化。

③「我々」集団成員間の同一化と組織化された行動系列の効率。

①は、人間が環境との接触によって、不適応状態であることを明確にするための過程である。言い換えれば、環境からいかに意味を読み取って「課題」を提示するかが①では問われる。さらに、環境をすでに作っている参照基準とリーダーシップ主体が属する制度の拘束を少なからず受ける。②は、①の「課題」がコミュニケーションによって伝わる、その処理のための行動に照らしてリーダーとフォロワーの役割が導かれることを述べている。ここでは、フォロワーからの信従をいかに引き出すかが問われている。リーダーの地位と権威の保持のために③の分業の効率が工夫される。組織効率の増加は、フォロワーが人間——自由度と多様性をもつ——であるがゆえに通減する。この人間性から「分派」や「埒外」の存在が生ずる。また、心理充足をもとにし、シンボルによって情緒的な喚起を生じさせる「同一化」の機能を利用して、行動系列の効率をはかる。ここにおいて、「課題」が処理される方向に進む。

京極においても、マス・メディアとリーダーシップ・シンボルとの関わりは表立っては表現されてはいない。しかしながら、「課題」の提示から分業効率への連鎖の中で、メディアを介在した「議題設定」（争点形成における議題「構築」——agenda-building——）の知見に関連づけることは可能であろう。つまり、状況の規定から、個人の環境不適応を公のそれに「転換」させる過程で、各個人の適応や方策との間の「権力闘争」が存在するともいえる。また、「課題」の処理方法に関して、フォロワーの支持と同一化をはかるしくみにおいても、メディアを媒介にする（しない）に関わらず、「議題構築」の傾向を読み取ることができるであろう。

行動科学の受容と象徴論の総合はさまざまな分野への影響を及ぼした。永井陽之助は、政治哲学の分野における象

徴研究に目を向けるとともに、政治シンボル論と政治意識論との統合を試みている(永井 1971)。

政治言語を「分析哲学」の立場から考察をするT・D・ウェルドン(T.D.Weldon)の『政治の言語』(The Vocabulary of Politics)の紹介をするときに、永井は政治の文脈で用いられる言語には二重の意味と機能をもつ象徴(体系)があると述べて、この点をウェルドンは考慮していないと批判する。この二重性とは、「一定の政治的行動様式ないし組織を記述・分析・説明するための用具」となる「認識象徴」と、「一定の社会集団の行動様式や組織の正当性の賦与(ないし剝奪)」をする「組織象徴」の二つの象徴から政治言語が構成されていることを示している。「組織象徴」は、人間の引照基準の変革・固着をはかり、生の意味付けと安定感を与えるはたらきがあるとしている。

では、人間にとって「組織象徴」はなぜ少なくとも政治行動において必要なのであろうか。この問いに対して、彼はまず、人間と象徴との関係から次のように述べる。⁽³¹⁾

「国家」や「民族」の表すものを社会化によって培わせる政治の世界は、見えざるものを見るもので表す「象徴」の作用に依存する。自発的・人為的な意味づけをする「象徴」は、「信号」や「記号」とは区別される、としている。ここにおいて、人間は、自らが象徴に意味づけをし、「象徴を操るもの」(カッシーラー)として存在することになる。つまり、自然や社会への適応に際して、「無の境地」となって調和と安定を得ることは、普通の人間にはできない。なら、がの象徴体系を媒介させて、環境との調和や適応をはかり、心理的にも肉体的にも安定感を得る。いいかえれば、環境への適応を意識したときには、適応についての何かしらの意味を見いださないとつねに不安定な状態に置かれてしまう、といってもよい。また、加えて、環境への適応の際に依拠する引照基準の体系も、様々な環境の変動によって人間の適応を支えることができない場合がある。このように、環境・引照基準の体系(象徴体系)・人間の思考・行動における試行錯誤の積み重ねによって、「神話」に代表されるような象徴体系もまた歴史的に形成されてきたということができる。

次いで、政治の文脈のなかで「組織象徴」が用いられる経緯を以下のように述べている。まず、政治を、「物理的強制力」を裏に持ちつつも心理的強制力に依拠し、利害対立が分化されやすいにもかかわらず擬制によって統合をはかる機能であるとみなす。この政治の規定は、たとえていえば以下のようなことになる。力よりも威嚇によって、分化されやすい利害を「まやかし」でまとめるのが政治である。この「まやかし」の役割を象徴が担うことになる。この象徴の扱い方が、政治の遂行者である政治家などと政策の受け手である大衆とでは若干異なっている。

統治側では、少数支配による通信と制御体系の再生産を保つ必要から、被治者の信従が必須となる。このため、理性的・情緒的な反応を生み出す象徴が求められる。これに対して、受け手である大衆の側では、少数支配の現実を受容せざるをえない（物理的あるいは経済的な強制力が担保とされているため）ので、理性的な服従の根拠を見つけたして統治の側だけでなく自らの側に対しても「理解と納得」を要求しなければならない。ここから公的イメージによる秩序意識が生じ、この要求に応える「合理化ならびに正統化の象徴」（＝「組織象徴」）が用いられる。さらに、環境への無限に近い適応の努力は、孤独への恐怖を生じさせ、共同組織への帰属感と連帯感を求める「同一化の象徴」が利用されることになる。

これら統治側と民衆側の両方の過程を通じて、政治の舞台で必要な価値の配分が正当化され、それへの同一化と信従がはかられ、環境から提示された問題の解決にあたるのである。

以上のように、人間の行動を規制し組織化する機能を持つ象徴は、人間の環境の状況化を促進させるはたらきを持ち、そこから、政治という人間行動がもたらす支配―被支配関係の持つ諸特徴からとの両方から、人間行動に大きな影響を与えるものであると永井は結論づけている。ここにおいても、環境をみずからの意味世界にとらえかえすことによって生ずる状況化の能力において、治者と被治者とは差異があるために、象徴の対抗という点では双方対等の関係にたつことは難しい。この点において、被治者の象徴の選択や解釈に対して自由度を高め、治者との隔たりを

縮めるためには、マス・メディアの持つ働きは大きい。「社会の木鐸」というシンボルも、被治者の側の象徴形成に支えとなりうる可能性を持つ。反面、マス・メディアの介在によって、メディアの影響から被治者と統治者との間に新たな解釈と象徴の選択が行なわれ(「第四の権力」「メディア・クラシー」とよばれるゆえんでもある)、マス・メディア自身が「状況の規定」の有力な候補となりうるのである。⁽³¹⁾

永井の提示した「組織象徴」の概念は、大衆社会論を背景にしている。このため、現代の社会における「見かけ」と「現実」の多元主義による社会論に直接適用するのは、上述したメディアの問題でも明らかなように、難しい点がある。しかしながら、権力関係を政治から社会にひろげつつ、政治意識と政治過程を「組織象徴」によって結びつけた彼の視点は、政治分析の展開に多くの示唆を残したのである。

道徳教育と「家族国家」観の起源を辿ることから出発し、日本政治思想史・日本政治史という歴史・思想の研究の蓄積を得て、かつこれらと並んで、言語の象徴機能を政治学の文脈から明らかにしようとしたのが石田雄である。彼は組織過程と象徴過程との関連を理論と現実の双方のアプローチからとらえ、⁽³²⁾「平和」概念の検討から、政治文化と(言語)象徴の機能を主要な関心としていくようになった。⁽³³⁾

政治文化と言語象徴との関連を考える上で、言語象徴による、利用者および利用対象の思考パターンの規定、言語表現が反映する利用者の思考パターン、の両方が問題になる、と石田は指摘する。「国民」という言葉が人々に与えるイメージが、人々の判断枠組に影響を与え、その結果生ずる、判断枠組から漏れる指示対象(在日韓国・朝鮮人の人々など、日本で生まれ育っていても国籍を持たない人々)を考えるならば、この「国民」という言葉が受け手であるわれわれの思考をどのように制約したかがわかる。他方、「自民党」支持者が掲げる「自由」と「民主主義」が指し示すものは、商工業者を中心とした「自由と民主主義」であるとするならば、この表現からこの言葉の使い手の思考の特質が

透けて見える。

このような政治文化と言語との関わりをみる手がかりとして、石田は次のような三つの視点を提示している。

① 政治文化分析の手がかりとしての言語

② 分析枠組としての言語

③ 伝達過程とフィードバック機能を持つ言語

①は、「社会で支配的な概念は、その社会の政治文化を凝集的に示す指標となる」という指摘にもとづき、「象徴による文化の手引き」(E・サピア)を引用し、社会的価値の「凝集シンボル」の役割を持つ言語が概念の媒体となると述べている。このように、言語一般が持つ社会的価値の反映という機能の言及から進んで、彼は政治言語の特質について述べていく。政治的に重要な言語は、日常使用している言語よりも、特定化された時期に特定の意味づけがされる(湾岸戦争後の「非武装中立」シンボルのマイナス・シンボル化およびシンボル自体の衰退と、「国際貢献」シンボルの台頭などが例としてあげられよう)。それとともに、当該政治言語のもつ意味が時代とともに変化する(上記の「非武装中立」参照)、ことを述べている。この時代による言語の意味の変遷は、近代日本においては翻訳語に著しく表れていたと指摘し、言語にみられる文化の受容の特徴について言及している。過去からの価値の貯蔵庫としてのはたらきを言語のなかに見いだした石田は、翻訳による異文化の交流には必ず「ズレ」を伴うものであり、かつ、翻訳語自体に内在された価値も意味に反映されるので、「(訳語の)一人歩き」が始まるとしている。

②は、比較の基準(定点)のための言語の役割をさしている。近代日本研究(広く非西欧圏の文化研究においても)では、分析をするための道具としての言語にすでに「西欧の概念や価値」が含まれている、と彼は述べる。この「二重構造」をマイナスと考えず、むしろプラスの価値づけをするところに、石田の考察の特筆すべき点がある。言語学では、ウォーフ(Benjamin Whorf)の、文化社会学ではウェーバー(Max Weber)の知見をそれぞれもとにして、二

つの異なった言語の接触から、双方の文化を見直す良い機会を得る場であるととらえる。つまり、「境界人」(marginal man)や「異邦人(の眼)」(佐藤(毅) 1961)の視点の重要性を説いている。言語を媒介にした文化の相対化を試みる視点ともいえる。

この視点は、政治の認識とも関わりを持つ。いわゆる「みる」政治が「する」政治に移行するときに必要な相対化であるともいえることができる。一定の型をもって政治の世界を認識する、その型の存在を知りつつ政治に何らかの衝撃を与える一つの方法として風刺や笑いの世界がある。風刺の対象と心的な距離をとり、「笑う」。あるいは、みずから道化となって世界の中心にいる人々をつぎつぎと戯画化することが可能になる。

③はコミュニケーションとしての言語をさす。受け手の反応から新しい情報の発信を考えるフィードバック機能は、自らの立場を解き放つための要件として大切であると考えられる。異なる文化の相互接触から、両方を見るための観察点の確認をするならば、③は②と親和性をもっているといえよう。双方の文化の反応をみ、次の刺激(発信)を考えるところに、双方の文化の境界線上に映し出される観察者自身の姿を描きだすことができるのである。

政治と言葉との関係を石田はさらに展開させて、「ことばの独裁」(言葉による人間の支配)(石田 1986)からの解放をめざし、政治の言葉の意味の変容過程の探求を試みた。一つの「ことば」の意味の時系列的な変化をみるとともに、同一の「ことば」に内包されている様々な意味が文化の多様性から端を発しているとして、政治権力による言葉の操作を受容する側の社会的基盤に着目して分析をしたのである。ここにおいて、コミュニケーションの「受け手」の視点に立った、政治言語の政治的意味の解明がされる契機が生じたのである。

〈第II世代〉の政治シンボル研究

政策の形成・決定過程を含む政党の政治過程研究に政治シンボル研究の蓄積を援用して、さらにここに独自の視座

を構築したのが田中善一郎の研究(田中 1981、1986)である。⁹⁶ 彼は、戦後日本の保守政権の持続性を支えた支配過程の機制を明らかにする際に、象徴を媒介にした政治的演技空間のなかで生ずる政治指導に着目し、その場に登場する主体の織り成す諸関係と、場としての演技空間の検討をともに行なった。

政治指導が生ずる場は一種独特な様相を帯びる。彼は、具体的な素材の配分に表れる政治社会を「演技共同体」とよび、象徴的素材の配分に携わる政治社会を「演技共同体」とよぶ(田中 1974b, p.23)。現代の大衆民主政において、政治情報(権力と大衆との相互関係に基づく)は直接無媒介ではありえず、政治指導は情報の送り手・受け手ともに象徴化されたものとして表されざるを得ない。この象徴を媒介にした政治指導の空間を「演技空間」と彼は名づける。そして、この「演技空間」において政治行為者は象徴化された指導を行ない、他方で政治社会の構成員はこの過程に代替的に参加するのである、とする。続けて、彼は、この場(「演技空間」)への主体的な参加を促すための契機として示された三つの時系列的特徴(①「象徴の呈示」、②「象徴の伝達」、③「象徴の受容」)から、「演技共同体」の構造を明らかにしていくのである。

①「象徴の呈示」については、多様な現実を象徴化する際に生ずる操作性から、演技を支える背景としての演出や、行為者の行動の象徴利用による演技の概念をそれぞれ導き、行為者が「演技空間」では芝居を演じなくてはならないことを示す。さらに、行為者が演技者たらざるを得ないことを次のように説明する。政治の世界は敵対関係をはらんだ世界であることから、「大きな情緒が外化される世界」であると位置づける。そこでの象徴は情緒の喚起が活性化されるので、善―悪、左―右、などのように両極化をして鮮明に表される。そして、象徴の鮮明化は反面、多様な事実の一面の断片を事実全体として表象するために、象徴が濫用されると、象徴自身のみならず「演技空間」自体も平凡化・図式化されて、ステレオタイプに陥る。これゆえ、政治指導の様式化を導く基礎ができる。また、演技の「脚本」の了解のされ方によって、「表舞台」と「舞台裏」の存在が見いだされ、この「演技空間」に複雑さを加える、と

述べている。

②「象徴の伝達」については、マス・メディアの議題設定機能から発展した環境（現実）構成機能と似た特質を、象徴論の立場から既に引き出している。⁽³⁷⁾ 田中は、マス・メディアは、象徴を媒介させるだけではなく、受け手にとって未知なるものに象徴を不可させて、「メディアの象徴化」を受け手に受容させる、と述べている。さらに、ケネス・バーク（Kenneth Burke）の見解を引いて、マス・メディアは政策の妥当性について、人々の判断にまで影響を及ぼすと主張する。これらは、受け手の現実の認知だけでなく、政策に対する態度にもマス・メディアが影響を与えていることを示している。

③「象徴の受容」については、マス・メディアの現実構合力や受け手の状況を示唆する言及が見られる（田中 1974 p.367-369）。⁽³⁸⁾ ここでは、メディアに媒介された「演技空間」の諸象徴に、「みずから（＝政治社会の構成員の大多数）を投射し同一化する」ことによって「演技空間」に参加したことになる。このとき、政治指導の側から必要な情緒的な素材を象徴に繰り込むことができる。かくして政治社会の構成員は「観衆」に「なる」が、認識枠組と情緒までもが取り込まれるのは、メディアの現実構合力を念頭に置いていることを示している。

また、政治社会の「観衆」は、政治指導への（期待をもって）見る「行為」によって演技者を拘束する。この点で「観衆」は能動的存在となっている。しかも、マス・メディアは営利企業のゆえに受け手の興味や関心に眼を向けて利潤を獲得しなければならないので、「意識的・計画的」に受け手の期待を支持し、受け手の能動性を補完する傾向がある。その結果、政治指導に対する期待は「安定的、保守的に強化される」のである。

能動的な観衆の期待と、メディアに媒介された象徴を通じて求めようとする政治的行為者の意図（構成員の象徴への同一化や投射による観客化、および感情の喚起の促進）とは相互にせめぎ合いながら「演技共同体」を構成する。ここに⁽³⁹⁾ おいて、演出・演技のみならず、それらを描写・叙述する言語自体が「それぞれの文化が有する価値関心を内在化」

させているため、観衆と政治指導が織り成す相互作用は、各々の政治文化によって決まる。また、上述した政治文化の決定の度合いにマス・メディアが介在し、かつ受け手の観衆の能動性が発揮できると解釈できるところがある(田中 1974b p.370)。政治指導者が演ずる役割の中で、「演技」次元での具体的な素材の配分を旨とする「演技的指導者」とは異なり、演技の次元で主役を占める「演技的指導者」の役割に田中は目を向ける。諸事象が擬人化もしくは擬物化することから、受け手の認知枠内に事象をある一定の型をもったものとして収斂させ、それら諸事象に象徴的に関わることで(解決するより、したふりも含む)観衆の安心感を得る。さらに、解決に伴う責任の取り方にも、諸要素の可能性を内包しつつ、表面上は単一の象徴によって行なわれる。事象の成功は指導者の実績となり、失敗すれば指導者の責任を問われるのである。

このような政治指導の具体相も、状況への能動的関与から変革を志向する「ひきい」型政治指導では、明確な役柄と芝居つ気たっぶりの政治責任の取り方で人々の観客化を強く促す。このため、メディアや観衆の能動性は十分に⁽⁴⁶⁾作動しない(田中 1974b p.372)。

他方、既存の社会関係を前提とし、争点の調整を図ることを主眼とする「まとめ」型政治指導では、状況への接触が「ひきい」型に比べて積極性を欠く。この消極性が役柄の曖昧さ、引責方法の受動性に表れる。現実過程の参与を強要することが少ないので、メディアや観衆が、「相対的に大きな力行使しうる余地」が「演技共同体」のルール作成において存在する、と述べている(田中 1974b p.373)。

とはいえ、「まとめ」型の政治指導においてもメディアや観衆が自律した能動性をもつとは限らない。前述した「政治文化」による規定がここに関わってくる。すなわち、「天下の大勢」、「勢」といわれるような、集団の営みの客体化から生ずる「自然になる」という価値体系である。この価値体系を巧みに利用して利害の調整を図るのが「まとめ」型の政治指導であるから、能動的な観衆といえどもあらかじめ枠が決められた中での選択行動を行なっているにすぎ⁽⁴⁷⁾

ない。それゆえ、観衆やメディアの自律性にもとづく能動性は、こうした政治文化の変動を期待させる可能性をもつ強力なリーダーシップをもつ「ひきい」型の政治指導に従属するという逆説が生ずる。この「逆説」を克服するには、「権力による意図的な操作によらないでも、自ら進んで操作される」状況の対象化と下位文化の多様性を発掘するしかないと思われる。

政治と儀礼との関係を、儀礼の政治的側面⁽⁴²⁾と政治の儀礼的側面⁽⁴³⁾の両方から象徴を手がかりに明らかにしようとしたのが、坂本孝治郎の諸研究である。

社会関係の中で、政治集団や権威をもつ集団(ないし個人)と一般の人々との関連から演じられる象徴過程が、儀礼の政治性を構築する。これに対して、政治を専門とする集団の中で演じられる「演技共同体」での「パフォーマンス」が政治過程における儀礼性を作り上げる。⁽⁴⁴⁾ いずれの場合にも、象徴過程で繰り上げられる演技の部分に坂本の関心の焦点がある。本稿では、儀礼の政治的側面についての研究を中心に叙述する。

彼は、儀礼の分析対象として「日本における特異な象徴的人物(symbolic leader)」(坂本 1988c p.18)である天皇(昭和天皇)が戦後行なった「象徴への行動」の代表的な事象である「戦後(地方)巡幸」⁽⁴⁵⁾と「国民体育大会」⁽⁴⁶⁾をとりあげている。

「戦後巡幸」は、「占領軍と日本政府による共同の危機管理の一環として、新憲法の制定および施行の過程と並行して実施され」、「神格者天皇」から「人間天皇・象徴天皇」へのイメージ変換をはかるための戦略イヴェントとしてとらえている(坂本 1988c p.8)。この戦略イヴェントは、臣民から国民へ変身する観衆と当該天皇との関係において十全に作用する。つまり、「天皇と国民とが新たな関係表現や相互儀礼を実験し学習する過程」がこのイヴェントの要件であり、かつ「天皇と国民とのあいだで終戦儀礼を交換」し、「象徴天皇制の社会的批准式」を徐々に全国にわたって行なう過程でもあったとする。ここにおいて、「戦後巡幸」は演じ手と観客の間で行なわれる「社会劇」(social drama)

の様相を帯びる。

また、この「社会劇」は象徴的人物への接近や求愛、上位者の担ぎにおいて演技的共同体を作るとともに、後に述べる歴史的背景から、分析の枠組みとして「コートシップ」(courtship)という作業仮説を用いている。その理由は次の通りである。「戦後巡幸」の過程で、「ともかくも社会的に開放された舞台に登場してきた天皇のパフォーマンスを、初めて国民が直接的に観賞」(坂本 1988c p.13)する機会に国民は恵まれた。それゆえ、「神秘性の器材する社会的な隔たりを乗り越えるための働きかけを前提とした、タテ関係の相互の表現行動及び行動儀礼」と定義された「コートシップ」が分析枠として援用されるのである。

この「コートシップ」によって演ぜられるドラマ(「コートシップ・ドラマ」)が上演されるときに、上位者―下位者のみならず複数の存在が役割を演じ合う。この中で、関係様式や関係距離の規制・管理をめぐる「政治」が生ずる、としている。つまり、「戦後巡幸」は一定の「政治的意図」⁽⁴⁷⁾をもった儀礼であるとともに、この中で演じられる「コートシップ・ドラマ」においても「政治」が生ずるために、前述した「政治的意図」とは違った形となつて継承される「意味」が生まれてくるのである。

坂本の研究は、従来の天皇(制)に関する規範的研究とは異なり、天皇(制)の装置や制度そのものに着目した経験的研究である(村松他 1992 p.226)。新聞報道にみる天皇と民衆との関係儀礼の再現は、儀礼過程がコミュニケーション過程でもあり、送り手と受け手との相互作用の所産であることを明らかにした。さらに、天皇(制)というシステムがこのようなメディアを媒介にして「創られた伝統」(invented tradition)を形成しつつあることを示した研究であるといえる。

また、方法論においても興味深い点がある。資料として和歌を用いた点と、記号論的な分析を行なった際に写真を利用した点である。和歌の利用は、文化的な表現様式に表れる(政治的)意味内容を抽出するために行なわれている。

この資料を単独に抽出することによって描きだされる象徴的世界の解釈だけでなく、国民体育大会の関係構図や各種年表ならびに儀式の式次第などの様々なコンテキストの俎上に和歌を乗せることによって、政治的意味や象徴的意味を引き出している。⁽⁴⁸⁾

写真を用いた政治的意味の分析は、二つの点で大きな刺激となり、展開の可能性をもつものである。一つには、政治の「図像記述学」(iconography)から「図像解釈学」(iconology)⁽⁴⁹⁾への道であり、もう一つは「メディアにおけるパフォーマンス」の問題である。

政治への図像学の援用は、政治報道への関心と結びつけば、テレビ放送の「画像」の内容分析に援用されるときに、当該放送の「活字」部分および「音声」の分析と組み合わせることによって、政治報道の「資料」としてのテレビ・メディア放送が可能になると考えられる。もっとも、ここにおいても「コンテキスト」をどのように設定し、どこにこの内容分析された「テレビ放送」を位置づけるかが問題として残されることにはなる。

「メディアにおけるパフォーマンス」の問題は、天皇(制)研究におけるテレビという「映像」メディアのもつ影響が、従来の天皇(制)パフォーマンスにどのように作用するのかが点である(秋篠宮ならびに現皇太子の成婚におけるテレビ・メディアのもつインパクトを想起されたい)。送り手と受け手との間に介在するマス・メディアは、まったくの「導体」としてのみ機能するわけではない。天皇(制)側が提示するパフォーマンスになんらかの「作為」をして視聴者(読者)に「提示」する、と考えられる。しかしながら、このような推論は、一般の「政治情報」ないし「社会情報」に対して「ニュース」としてとりあげる場合に得られた研究をもとにしているため、推測の域を出ていない。したがって、マス・メディアは象徴的人物と一般民衆との間に介在して、新しい「演技共同体」を構成する働きを有するのか、あるいはこの「共同体」に参与したとしても単なる「背景」の一端を担うだけで、象徴と受け手の間の「導体」にすぎないのか、という問いは依然として課題のまま残されている。

②政治漫画との関連

日本における政治シンボル研究と政治漫画との関連は、「第Ⅰ世代」においては直接的な関連をみることは難しい。政治漫画がもつメディアとしての性格がここに影響をあたえているようである。「第Ⅰ世代」のシンボル研究がもつばら大衆社会論に基づいていることや、当時（四〇年代後半～五〇年代）のマス・メディア研究の状況から考えると、八〇年代から登場した政治漫画研究を「直接」位置づけることは無理があると判断できるからである。⁽⁵⁰⁾したがって、ここでは「第Ⅱ世代」の政治シンボル研究において、「第Ⅰ世代」との連続性を表わす一つの特徴である、「演技・演劇論的アプローチ」と政治漫画との関係について、特に坂本の「行幸研究」を中心に言及する。

坂本の「行幸研究」の分析手法から、特記すべき方法論を政治漫画との関連において見出すことができる。一つには、「コートシップ」とリーダーシップとの関係を分析する図式としての座標軸による考察である。彼は、「町村次元における国民体育大会の象徴構造」を分析する際に、「会場地町村」では、横軸に「競技種目の有意性」を、縦軸には「象徴的人物の来訪の有無」を尺度とし、そこから得られる四つの次元を類型としている（坂本 1988c p.46-52）。さらに、「非会場地町村」の類型として、横軸には「間接的参加の程度」を、縦軸には「脚光体験」を尺度として、これらを直交させることで四つの類型を提示している。ここで興味深いのは、後者における「間接的参加の程度」が負で、「脚光体験」が正である次元（F₂G₂で示されている。本稿も以下略記）のケースである。⁽⁵²⁾

この「F₂G₂」は、「主要イヴェント」（国民体育大会）に賛同せず、反対の意志表示をする対応の類型である。この類型が「厄介者」として排斥されるか、「主要イヴェント」に包摂されるか、あるいは「対抗運動」として成立するかは「ひとつの勢力ないし組織団体によって担われ」るか否かにかかっていると彼は述べている。この指摘は、メディア

アが運動(特に反対・抵抗運動)についてのみならず、ニュースとしての価値判断(ニュース・バリュー)の問題についてにも言及する余地を残していると考えられる。

「主要イヴェント」に反対する勢力が、自らの主張を公に提示して関心ないし支持を得ようとメディアに活動内容を報道させても、意図せぬ扱いや反響に耐えられるだけの「十分な」勢力および組織力が当該反対勢力に備わっていないと、単なる一過性のニュースとして「興味本位に」とりあげられるにすぎず、かえって「主要イヴェント」主催側の切り返し報道(ないし無反応——「金持ち喧嘩せず」の対応——)を示されると、彼らの「懐の深さ」を象徴化する役目を反対勢力が果たすことになるおそれがある。現代の、特に映像を中心とするメディアにおいては、どのように「目に訴えたか」が主流となり、かつ、「白黒はつきりさせる」二元論的な価値基準——しかも、作り手の「面白さ」の基準に左右される——に大きく影響を受けるのである。言い換えれば、「社会の木鐸」としてのジャーナリストティックな姿勢を、メディアが必ずしも「反対勢力」の主張の報道に対してもつとは限らないといえる。

こうして、「F₂G」の類型は、メディアに内在する「ドラマ的」志向にもとづく「ニュース・バリュー」の引照基準によっても、「国民体育大会(『主要イヴェント』)に包摂される」か、「厄介者」のレッテルをメディアによって貼られて排除されるか、いずれかの結末をむかえる可能性が高いと考えられる。

このような「F₂G」のメディアによる侵食作用は、メディアとしての政治漫画や漫画一般にはらむ問題点を象徴している。すなわち、政治漫画のみならず、漫画一般にも(ことに商業化と「シンジケート化」された(syndicated)漫画)について、マス・メディアと同様のことが言える。つまり、政治批判そのものを戯画化してしまふという点にそれはいみ出される。政治や社会の諸現象を戯画化して、からかいや嘲笑の対象とすることによって当該問題を対象化したり、曖昧模糊とした形に政治問題を「非政治化」するような「政治技術」に対して、その「政治性」を暴露したりするのが、政治漫画の戯画化による体制批判・政治批判の働きであった。また、このような「政治批判」の色彩は、こ

く一部ではあったけれども漫画一般にも存在していた。

ところが、前述した商業主義やそれにもとづく編集者と漫画家との「シンジケート化」によって、戯画や嘲笑が「風刺」の枠を超えると、政治批判そのものも戯画の対象となる。確かに批判をする漫画自体を笑うことがただちに政治漫画の「風刺画」性を喪失させるわけではない（むしろ、政治漫画と対象との密接なつながりによる弊害を回避させるという重要な働きをもっている）。しかし、自らへの批判に抵抗力のない脆弱な批判勢力は、マス・メディアと反対勢力との関係と同様に、政治漫画からの批判や戯画化を自己省察としてとどめることができずに、自己否定に導いてしまい、結果として潰れてしまう。加えて、「批判」や「戯画化」を多数派から少数派や弱者に矛先を向けた政治漫画や漫画も、自らのもつ漫画としての特徴を批判によって食い潰れてしまう。そのような政治漫画や漫画が多くなれば、漫画全体が衰退の憂き目に遭うことになる。

かくして、政治漫画や漫画の中で「戯画化」を媒介にした「政治権力」闘争が、体制から反体制へ、多数派から少数派へ向けて還流される。これは、戯画機能の衰退と道具としての政治漫画へのみずからの墮落を意味し、描き手個人とそれを支える集団・組織・環境の対象への隷属を意味することになるのである。

(18) (京極1968)。なお、このようなラスウェル・モデルをもって戦後初めて論壇に登場したのが丸山真男である（丸山1947、1952）。

(19) (山川1983)九三頁参照。

(20) 「第II世代」は現在進行中であり、「第I世代」のようなはつきりとした集団を形成してはいない。「第II世代」の「拡散」の理由として、行動科学の一層の進展がシンボル研究に内在する一種の質的分析と相容れない部分があることと、山川雄己が指摘するよう、行動論派研究者（Ⅱ「第I世代」）の理論モデルを發展させる忍耐を、後の政治学研究者全般が欠いていたこと（山川1983 p.90-91）などがあげられよう。

- (21) 敬称は略。以下、登場する日本の研究者についても同様。
- (22) (岡 1953)。この論文は、「一 まえがき」、「一 権威の循環」、「三 象徴の選択 I」からなっており、「三章」の途中から先は続稿となっているが、未完のままである。この論文の未完部分を含めた解説として、(山川 1983)が参考になる。なお、本文中の引用の際、新かな・漢字に修正した。
- (23) 岡義武編『現代日本の政治過程』(岩波書店 一九五八年)所収。この論文の中で、すでに岡義達(達)は選挙の儀礼性について言及している。個人の自己責任と没却という相互矛盾する原理を内にもつ日本の価値体系(態度)の反映として、選択行動が同化の手段となることを導き、結果として価値の表明になるとしている。大衆社会論に基づく大衆の政治行動が近代の市民社会の市民のそれとは異なり、情緒的対応を中心に位置づけられるのに対して、日本の文化的特性から「選挙の儀礼性」について述べている。これは、「政党はあまりに文化と密接した『軟性組織』である」(岡 1958 p.70)という規定から導かれることとして考えることができる。
- (24) 福沢諭吉の「多事争論」(「文明論之概略」)を想起することができよう。
- (25) 現実をヨリ有利な「現実」にツクリカエルことが求められる。象徴の相互提示による「現実」の規定合戦が権力介在の契機となるともいえる。鹿野(鹿野 1986)は、現実の再構成論をフレーム概念に限定して、「社会心理学」的に概説した。
- (26) 「異常循環」の解消を「大衆の自発性」に求めている点だが、「市民社会」論的ではある。
- (27) したがって、官僚の汚職や贈収賄事件は、官僚自らだけでなく政治家を含む政治システム全体に対する帰属感への減退となって表れる。
- (28) 山川の指摘にもあるように、「同化」は政治社会への吸収や合併を余儀なくされる個人や集団の姿をイメージさせるので、assimilationの訳のほうが適切であろう。(岡 1953 p.642) (山川 1982)。
- (29) (岡 1974)。彼は、演技と政治との関わりから「道化」や「愚者」のもつ政治的役割について言及している。「道化」の持つ「笑い」に着目するならば、政治漫画における「笑い」の問題にも示唆を得ることが大きいと思われる。今後の課題としたい。
- (30) 第四章の「イデオロギーと組織象徴」において言及されている。
- (31) メディアが状況の定義に参与することについては、前註(25)を参照。メディアが受け手にとって「強力な」現実構成力をもつだけでなく、送り手である「権力体」に対しても何らかの構成力をもつ——単なる送り手の形成する現実を映し出す「鏡」に墮する

ことが多いとしても——ことが十分に検討される必要があるだろう。

- (32) (石田 1983 p.233-234)。
- (33) (石田 1961)。
- (34) 石田は、(石田 1983) において、S・ヴァーバ (Sidney Verba) の政治文化の定義を導入している。「政治的相互作用と政治的諸制度の型についての信条の体系」を「政治文化」とよんでいる。(Verba 1965)
- (35) 石田によれば、「ことは」は日常言語として用いられる面を強調するときに使い、「言葉」は「ことは」に加えて分析枠組としての概念とを合わせてよぶときに使う、としている。(石田 1989 p.11)
- (36) (田中 1981) は、『国家学会雑誌』に四回に分けて掲載された論文(田中 1973' 1974a' 1974b' 1977) をまとめたものである。本稿での引用は雑誌掲載時のものに依拠した。
- (37) (田中 1974b' p.366-368)。ちなみに、「マコームズとショアの論文は一九七二年であり、擬似環境論と議題設定論との組合せが日本で注目されたのは八〇年代初めである(竹下 1981)。
- (38) メディアは営利企業であるから(NHKにおいても大筋は変わらない)、構成員の期待よりも広告収入源であるスポンサーを重視する傾向がある。原子力発電所建設反対が構成員の指導者への期待であっても、電力会社提供の番組では原発批判はできないのと同じである。
- (39) 本稿、石田雄の部分参照。また、C・ミュラーの言語の役割(過去からの価値の貯蔵庫)についても参照のこと。(ミュラー 1978 p.28)
- (40) 見かけ上の自発性は、リーダーを讀めるミラングとして機能する。
- (41) (岡田 1982 p.34)。岡田は、J・L・フリードマンとD・O・シアーズの研究を紹介して、彼らがマス・メディアの効果研究における受け手の選択的接触に基づく能動性に疑義を投げ掛けていることを指摘する。(Freedman & Sears 1965)
- (42) 「坂本の行幸研究」(村松 1989 p.226-227) と称された「一連の研究(坂本 1988c' 1989)がこれにあたる。行幸研究のスタートとなった論文は後者の著作に収録されている。なお、ここのいう儀礼の「政治性」とは、儀礼的行為がもっている支配関係の確認を通じた価値や利益の分配の特徴をさす。
- (43) 日本政治学会の年報に掲載された諸論文を含む、国会を対象にした研究をさす。(坂本 1986' 1987' 1988a' 1988b') 国会における

法案審議の中に見られる政治手続きをデータをもとに丹念に追求することによって明らかにするとともに、そこからみられる「儀礼」(定型化された行動の中に含まれる価値や信念の神話化された体系)性」を読み取るものである。

- (44) 政治の儀礼的側面の分析は、メディアやそれを「見る」観衆としての民衆をも巻き込んだ「儀礼」の過程の分析に展開していくことが予想される。

- (45) 戦後地方巡幸は、一九四六年二月の神奈川県を皮切りに四八年に中断ののち、四九年から五一年まで、および五四年の北海道を終着とする、「戦禍をうけた国民(くにたみ)を慰め激励し、ともに戦後復興・日本再建にいそしむことを約束し、それを依頼する、巡礼の旅」(坂本 1989, iii)であった。

- (46) 「国民体育大会」への天皇の出席は、一九四七年一〇月、北陸三県を巡幸中の天皇が「ひとりで」第二回秋季国体に金沢市運動場に登場したことから始まり、第四回関東大会以来、天皇・皇后の開会式出席が恒例となった。(坂本 1989c, p.18-19)

- (47) 戦後巡幸の目的・機能は次の四つである。(坂本 1989, iii)

①積極的な天皇の接近による、復興の激励の儀式

②戦争で損なわれた感情の慰撫、戦争責任の心理的解消

③米国への儀礼的応答と国民への現前の披露と学習

④「象徴天皇制」を社会的に認知し、社会的正統性を客観化すること

- (48) この分析手法は、エーデルマンの「芸術から政治へ」の著作の知見と組み合わせることができるのではないと思われる。筆者の今後の課題としたい。

- (49) 「画像叙述学」と「画像解釈学」の分類は、以下の文献によるところが大きい。(佐藤 1994, (パノフスキー 1987)。とくにパノフスキーは、「画像を記述する科学」(イコノグラフィ)から「深い意味でのイコノグラフィ」としての「総合的直観による象徴的価値の世界観の解明」(イコノロジー)への発展の可能性を示唆した。

- (50) もっとも、「シンボル」としての政治漫画の側面については、「第I世代」の研究に大きな影響を受けた。

- (51) 国民体育大会に、国民の参加した祭典という性格を持たせるために、「上向的な精神的動員」と「下向的な負担過重」という象徴と権力の対抗による町村次元の参加が求められるとして、坂本は以下のような象徴構造を提示する。会場となる町村では、実施される競技種目が当該町村にとって自らを目立たせることができるかどうかという、「競技種目の有意性」という尺度を横軸に、天皇・

皇后ないし宮殿下などの象徴的人物が町村に来訪あるいは競技の観覧の有無を表わす「象徴的人物の来訪」という尺度を縦軸にし、それらが直交することからできる四つの次元(縦横の軸がともに正の次元を F_1G_1 とし、反時計回りに F_2G_2 、 F_3G_3 、 F_4G_4 とする)に類型化される、としている。また、会場とならない町村については、国体気分が高められたかどうかをみる「間接的参加の程度」尺度とを横軸に、なんらかの要因によって全国的規模のスポットライトを浴びた経験の有無をみる「脚光体験」尺度を縦軸にして、これらを直交させてできる四つの次元(縦横の軸がともに正の次元を F_1G_1 とし、反時計回りに F_2G_2 、 F_3G_3 、 F_4G_4 とする)に類型化される、としている。

(52) 一九七〇年三月から一〇月にかけて開催された日本万国博覧会において、これに反対するベ平連を中心とする団体が企画した「パンパク」や、石川県金沢市で毎年二月に開かれる「フードピア」が奢侈(参加費用が万単位の「食談」に象徴されるような)に傾いているという批判を「象徴化」するために、犀川べりで開かれる「フード・ブア」などがこの例にあたる。

(53) テレビ・メディアは映像のみが着目されるだけでなく、キャプションとして付随する「文字」ないし音声として伝わる「解説」の形をとる「文字・活字情報」についても注目すべきである。ある番組で「橋本内閣(第一次、第二次も含めた、一九九六年一月一日から二月三日まで)の一年」と称したコーナーでは、「住専問題」、「沖縄基地返還問題」、「薬害エイズ問題」をとりあげた映像とともに音声では「(これら諸問題を)すべてへ処理した」と報じた。これら諸問題を政策としてどのように実行したかについては評価がわかるにもかかわらず、「報道番組」の〈色彩〉をもつ当該番組がこのような「評価語」を羅列していたのは注視すべきであろう。